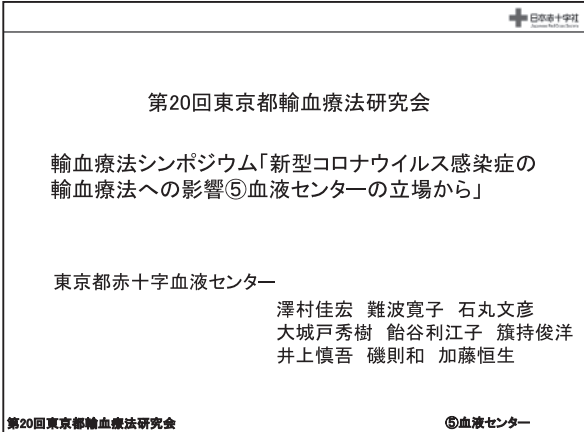


## ⑤ 血液センターの立場から

東京都赤十字血液センター 澤村佳宏

私は東京都赤十字血液センターの澤村と申します。このような発表の機会を与えていただいた藤田先生はじめ東京都輸血療法研究会関係者の方々に感謝申し上げます。また日頃よりお世話になっております医療機関様におかれましても、この場をお借りしまして改めて御礼申し上げます。

### 【スライド1】

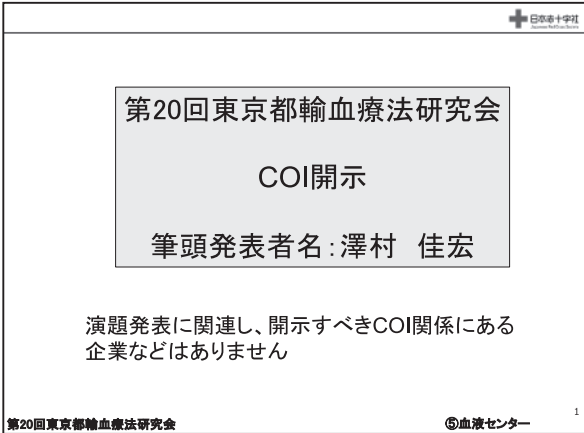


第20回東京都輸血療法研究会  
輸血療法シンポジウム「新型コロナウイルス感染症の輸血療法への影響⑤血液センターの立場から」  
東京都赤十字血液センター  
澤村佳宏 難波寛子 石丸文彦  
大城戸秀樹 飴谷利江子 旗持俊洋  
井上慎吾 磯則和 加藤恒生

第20回東京都輸血療法研究会 ⑤血液センター

最初にCOIを提示いたします。今回の発表に関連し開示すべき利益相反はございません。

### 【スライド2】



第20回東京都輸血療法研究会  
COI開示  
筆頭発表者名: 澤村 佳宏  
演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません

第20回東京都輸血療法研究会 ⑤血液センター

## 【スライド3】

私からはコロナ禍における輸血医療への影響について、血液センターの立場から述べさせていただきます。第一に血液使用量、特に赤血球製剤への影響について。次に、需要供給のギャップの有無についてお話させていただきます。さらに医師としての立場から献血検診医の勤務状況。4点目に厚生労働省委託事業であります回復者血漿採取について触れさせていただきます。

+ 日本赤十字社

**—血液センターの立場から—**

- 1) 血液使用量への影響
- 2) 需給ギャップはあったのか？
- 3) 検診医師の勤務状況は？
- 4) 特殊免疫グロブリン製剤支援事業  
(いわゆる回復者血漿採取) について

第20回東京都輸血療法研究会
⑤血液センター

## 【スライド4】

一点目の血液使用量へのコロナ感染の影響についてですが、結論を申せば、極めて一時的な使用量の減少はありましたが、概ね例年通りでございました。

+ 日本赤十字社

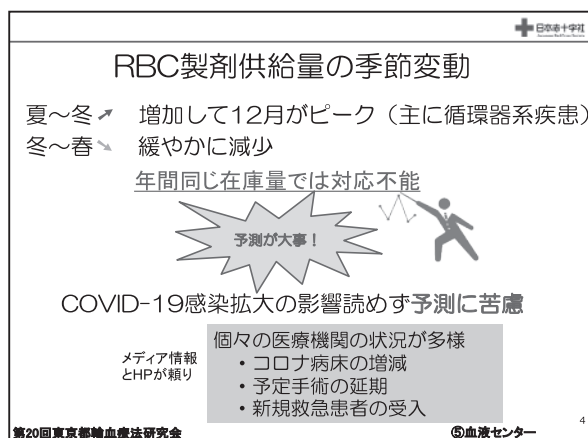
1) 血液使用量への影響

➡ 一時的な減少のみ

第20回東京都輸血療法研究会
⑤血液センター

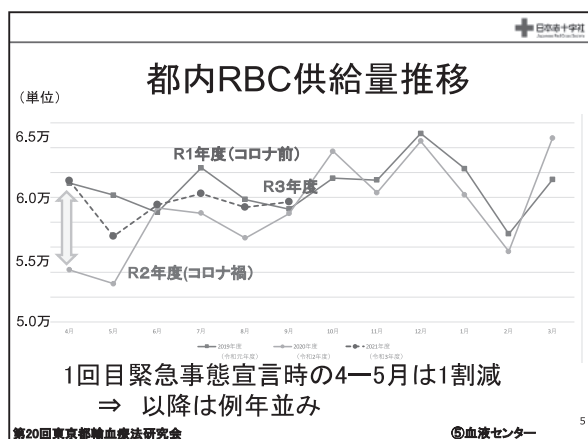
【スライド5】

コロナ以前の RBC 製剤供給量についてご説明いたします。季節変動がありまして夏から冬にかけて増加して12月がピークとなります。以降は春にかけて緩やかに減少します。このような季節変動は FFP や血小板製剤には顕著ではございません。これは冬場に心筋梗塞や解離性大動脈瘤などの循環器疾患が増えて、手術での需要が増大するためではないかと思われまます。よって年間通じて一定の在庫量では対応できません。予測が大事となりますが、コロナ拡大時に予測がつかず難渋いたしました。個々の医療機関の多様な状況、すなわちコロナ病床の増減、予定手術延期状況、クラスター発生に伴う新規患者受け入れ状況などの情報が掴みにくかったことが大きかったです。医療機関様にアプローチしてなんとか情報入手に努めておりましたが、結局のところ、メディア情報が頼りという状態でした。



過去3年間の都内供給量の推移を月毎に示します。横軸は4月から3月まで。縦軸が単位数です。実線グラフの令和元年度に比べ、最初の緊急事態宣言のあった薄い実線グラフの令和2年度では4月5月が1割ほど減少しました。以後はほぼ例年通りの供給量でした。破線グラフの令和3年度もコロナ前と大差なく経過しています。

【スライド6】



【スライド7】

ついでコロナ環境下の需要と供給のギャップの有無について説明いたします。結論からいいますと医療機関様に大きなご迷惑には至りませんでした。RBC 製剤で大いにギャップがありました。さらに、現在も血液確保に難渋しておる状況でございます。

2) 需給ギャップはあったのか？

- RBCで大いにギャップあり
- 現在でも難渋

第20回東京都輸血療法研究会 血液センター

【スライド8】

こちらの写真を供覧いたします。これは1400万都民を賄う最大の血液保管庫である新宿都センター冷蔵庫の昨年冬季の風景です。一番多いはずのA型赤血球が2籠しかありません。O型も少ないです。在庫潤沢時の写真と比較しますと一目瞭然です。普段は製品が棚を埋め尽くし、向こう側が見渡せない状況でした。

都民を賄う最大の冷蔵庫 令和2年冬季の夕景

A型 O型

在庫潤沢時

第20回東京都輸血療法研究会 血液センター

【スライド9】

輸血用血液製剤の在庫量の安定化が私たちの最大の使命です。それを達成するためには採血と供給量のバランスが重要となります。コロナ禍では、常に供給量が採血量を上回り不足の状態が続いております。

在庫数量の安定化は、採血と供給のバランスが重要！

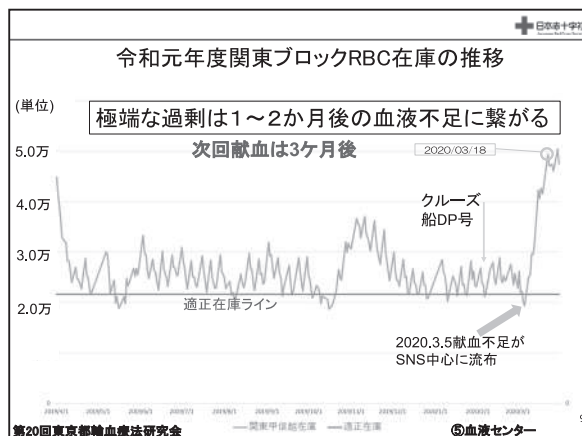
過剰 平衡 不足

コロナ禍においては、この状況が続いている…。

第20回東京都輸血療法研究会 血液センター

【スライド10】

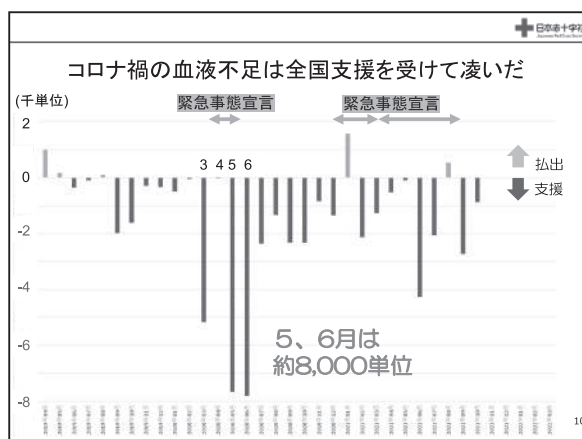
在庫不足はともかく、過剰の何が問題かはわかりにくいかと存じます。コロナ発生初期の年度末の状況を一例としてご説明いたします。過剰の一番の問題は数ヶ月後の不足に繋がるという理由からです。400ml献血後はどんなに善意をお持ちでも3ヶ月間は採血できなくなります。昨年2月にクルーズ船が問題になり3月初めに献血者の減少がSNSで話題になりました。有名スポーツ選手の発信力のおかげで、大きな反響がありました。3月初旬だけで、全国的に多数のご協力がいただけました。非常に助かりましたが、その反動が2ヶ月後に参りました。



令和2年度の5月6月に大きく影響し、関東ブロックで血液不足が著明となりました。ただ、関東以外では採血が好調であったため全国支援で不足を乗り切ることができました。支援の量は月間で8千単位にも登りました。しかし冬場は全国的に需要増大するためあまり支援を受けることができませんでした。

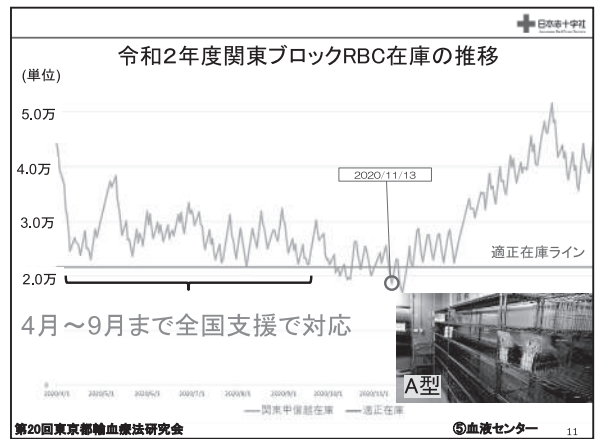
【スライド11】

令和2年度の5月6月に大きく影響し、関東ブロックで血液不足が著明となりました。ただ、関東以外では採血が好調であったため全国支援で不足を乗り切ることができました。支援の量は月間で8千単位にも登りました。しかし冬場は全国的に需要増大するためあまり支援を受けることができませんでした。



【スライド12】

令和2年度の在庫推移を示します。4月から9月までは全国的支援もあり見かけ上の在庫は比較的落ち着いていました。しかし年末に在庫がギリギリになりました。それがこのような写真の時期です。1月以降に需要が減少し、なんとか乗り切ることができました。



【スライド13】

血液不足は終わった訳ではなく現在も続いております。8月までは安定しておりましたが、9月にも在庫が厳しくなっております。

